

大都市における幼児の野外教育

— 大森ジャングル探検隊 —*

石田 康幸 埼玉大学教育学部

Outdoor Education for Pre-schoolers in Large Cities

Yasuyuki Ishida

Faculty of Education, Saitama University

KEY WORD : outdoor education, small children, big city

1. はじめに

二酸化炭素などの温室効果ガスの急増に起因する温暖化、酸性雨や過剰伐採による森林の破壊など、地球規模での環境異変が進んでいる。また、開発途上国での、急激な人口増加の問題も大きい¹⁾。

これら諸問題の解決のために、政・官・学・産業界および市民の全てが一体となって環境と調和しながら発展して行く道を早急に見つけなければならない。このような背景の下、わが国をはじめ世界中で、様々な環境保全技術が開発されるようになってきた。

しかしこれだけでははなはだ不十分である。地球生態系のなかでは人類は未熟な新参者であり、その生き方が今日の事態を招いたのである。そこで今や「自然に帰れ」の叫びとともに、生態系保全型の生活を一人一人が始めなくてはならない。自家用車の利用を抑える、節電・節水、フロン製品の節約、ティッシュペーパー・コピー用紙・割ばしの節約など、省エネ・省資源に努める。住宅やオフィスを作るときは、できるだけ自然を残し、さらに植樹を行う。山野・河川・海の自然をありのまま楽しむ等々。しかし、幼少時代を比較的豊かな自然に囲まれて育ったわれわれの年代でも、これは言うはやすし、行うはかたしである。まして今の青少年には至難のわざであろう。このようなことから、現在先進国を中心に環境教育、とりわけ野外・自然教育の充実が叫ばれている。

本来自然愛護、環境の保全等に関する事項は、生活する地域の中で遊びなどを通して半ば自然に身につけるものであった。しかし大都會をはじめ多くの地域で、身の回りに自然が極端に少なくなったこと、産業技術の発展、人間活動の大幅な増大などによって環境に対する負荷が予想もつかないほど拡大したことから、これらの事柄を組織的な教育によって身につけさせる必要が生じてきた。

米国ではフロンティア精神の開拓を付加した環境・自然教育が野外教育 (outdoor education) としてかなりの州で行われている²⁾。わが国でも今期の指導要領等の改訂で幼児教育に「環境」³⁾が小学校低学年に「生活科」⁴⁾が設けられることになった。これらの設置については賛否両論、様々な意見があるが、著者は地球環境保全の立場から積極的に評価したい。

最近、野外教育シンポジウムや環境教育学会において、幼児教育や小・中・高における野外・自然教育の実践報告が相次いでなされているが、山形県の共同保育園での実践が興味深い⁵⁾。草刈広一氏はその中で、2～3歳頃の幼児が既に、畑の畦と畦間の区別がつくことを指摘し、幼児からの自然体験学習の重要性を示唆した。また熊野川小学校教諭の湊秋作氏も、環境・自然教育は幼稚園児～小学校低学年頃が最も効果的で、それ以上の年齢で行う場合は効果が劣るので、それなりの工夫が必要であると思う⁶⁾、と述べている。著者も無農薬野菜栽培農家の援農において、4～5歳児がニンジンなどの幼植物と雑草のそれとを、簡

*1991年6月6日受理

単な説明のみで識別し、除草作業などを比較的素直に的確にやることを認めた。このように学齢前1～2年の幼児及び小学校低学年の児童に対する野外・自然・環境教育は効果的でかつ人格形成に資すること甚だ大であると思われる。その意味で、上記の「環境」及び「生活科」の設置は大いに期待される。

著者はここ十年来、妻とともに、園児あるいは卒園生の親として馬込共同保育所（以下馬込と略称）の活動の一端にかかわってきたが、馬込の活動のうち野外活動の観点から価値あると思われる点を紹介したい。

なお、本報を取りまとめるに当たり、馬込の松井妙子・佐野良一・渡辺勝美氏ら現・元職員、重松正文・順子夫妻ら元園児の御両親、並びに石川里香・田中健一郎さんら退・卒園生の皆さんに、資料提供など種々御援助いただきましたので、記して感謝します。

2. 馬込共同保育所の概要

(1) 保育所の場所及び目標、成立の経緯等

東京から大船方面行きの京浜東北線で大森から蒲田に向かう電車の進行方向右側にチラッと見える線路際のごめかしい二階建の一軒の貸家。それが大田区山王3丁目11の馬込共同保育所である。以前、台所の外側に掲げられた看板に書かれていた「働く者の利益を守りみんなの子供をみんなで育てよう」⁸⁰が最大の目標。

1974（昭和49年）に当時、公立保育園ではほとんど行われていなかった産休明けからの0才児保育に迫られたT婦人を中心として、2～3年間のリヤカーを引きながらの廃品回収などによる約200万円の資金調達の後、どうせなら公立とはひと味違う「親・保育者・子供たち、それぞれがのびのびと楽しく生活できる保育所を作ろう」と現地にほど近い馬込の貸家で開園した。その後、別の貸家を経て現在に至る。

保育所の所在地、山王地区はJR線大森駅の南西の線路際、大森の海岸平野からみて、台地のすぐ下に位置し、周囲は起伏に富み、大都会のなかでは比較的自然に恵まれ、近くに崖、川、海など

がある。また神社・仏閣、大正・昭和に活躍した文化人の住居跡など、文化遺産も多い。

(2) 幼児の数と構成及び父母の職業

定員は0～6歳児まで25名で、年齢が小さい順に、もも、すもも、かき、くり、おおぐりの5組に分かれ、保育される。父母の職業は、馬込職員の他、教員、会社員、保健婦、看護婦、区職員、建築設計（自営）、ピアノ教師、スナック経営、生協職員、カメラマン、服飾デザイナー、造園業、管理人、編集者、印刷会社経営、商店手伝い、電気屋、弁護士など多様。

(3) 職員構成と運営組織及び財政

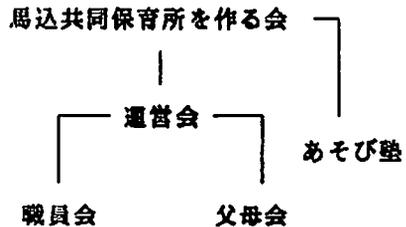


図1 運営組織

最近5～6年は、5～6名の保母と1～2名の保父を中心に、職員と親たちが協力しながら維持・運営にあっている（図1）。職員の年齢は20～40代で、勤務年数は10年以上が3名で他の人も比較的長い。就職時の年齢は20代が多いが、10～40代と多様である。現在、保母の有資格者は、園長の松井妙子氏ほか3名であるが、看護婦、美容師など経歴は多彩である。また、出身地は地元大田区のほか、青森、秋田、岩手、埼玉、千葉など多地域で、幼少時代、自然の中で五感を大いに使って遊んだ体験を持つ人が多い。

財政面はかなり苦しく、職員給与を低く抑え、バザーや後述の「あそび塾」などの収入を加えてその日暮らし。補助金の増額を切に望んでいる。

(4) 活動の特徴

他の無認可保育所と違い、乳児も乳母車等でできるだけ外に出し、親たちは他人の子供にも関心をもち、手があげば気軽に世話をする。子供たちどうし、子供と職員や親、親どうしはお互いに愛

称で呼び会い⁴⁹⁾、仲間意識が旺盛である。

庭が極端に狭く、遊び場がないので、簡単な栽培・飼育の他は野外活動が中心で、これが馬込の最大の特徴である。

1日のスケジュールは概略以下の通りである。

9時まで	登園
10時頃	ジャングル探検隊出発（おおぐり、くり、かき、すもも）
12時頃	帰園、食事（弁当持ち、弁当を届ける場合あり）
13時頃～16時頃	お昼寝（この間に、保育者は連絡ノートを書く）
16時頃	おやつ
17時頃～	帰宅

また、主な行事の年間スケジュールは以下の通りである（1988年の場合）。

1月30日	おもちつきとガレージセール（山王3丁目公園）、23kgのもち米完売
3月26日	お別かれ会、6名卒園、3名退園（南馬込文化センター）
4月1日	子ども20名でスタート
4月16,17日	春のバザー、初めて100万を超える（山王3丁目公園）
22日	教育問題懇談会「重松先生を囲んで」
30日	森 冬美さんの「からだのおしゃべり会」
5月	雨のためガレージセール中止
6月4日	大森の海遠足
10日	かき、くり、おおぐり、「おとまり保育」子ども25名になる
7月28,29日	遊び塾キャンプ
30,31日	馬込キャンプ
8月	馬込特製のプール完成
9月18日	運動会（山王公園）
11月12,13日	秋のバザー、目標額達成（山王

3丁目公園)

12月24日 クリスマス会（南馬込文化センター）

3. 大森ジャングル探検隊

馬込では、創立当初から、「本来、子供は自分たちが住んでいる地域との関わりの中で育っていくもの」という視点を堅持し、庭が狭いことも加わって「大森の街全部が僕たちの庭」保育が摸索、実践されてきた。

園長の松井氏は以下のように述べている。「子供たちにとって街はジャングルだ。そのジャングルをもっと探検しよう、と大森ジャングル探検隊は毎日街の探検に出かけていく。

ときには公園にガスコンロを持ちだして、春の野菜天ぷらパーティが始まる。保父のさのしが揚げるタンポポ天ぷらは天下一品のおいしさだ。おぼけの森でたわわに実った山ぐわの実を発見したときは、おおぐり（年長組）の建ちゃんと克典が頑張ってザルにいっぱい採り、ジャムにしてみんなで食べた。大森の埋立地の干潟の探検に出かける日もある。カニや魚を捕まえて、飽きたら泳ぐ、池上本門寺の崖登りはスリルがある。弁天池で冬眠から覚めたばかりのデカガマガエルやカメを捕まえるのはおもしろい。街は本当に宝箱のようだ。

しかし、おもしろいことばかりではない。大好きなハラッパが地価高騰の影響で次々とつぶされていく。野鳥公園のそばのザリガニのとれる池も埋め立てられて大規模市場の下となった。干潟の消失も心配だ。遊び場がどんどん消えて行く過程をしっかり見据えることは、子供たちの将来の生き方に大きく影響するだろう。」⁵⁰⁾

大田区内には公園・緑地が119か所、児童公園が256か所、児童遊園が61か所、計436か所、面積にして1,799,862㎡もある⁵¹⁾。これらが全て遊び場の候補地である。都立の大井埠頭中央海浜・東京港野鳥・京浜島つばき公園、区立の貴船堀・森々崎公園、旧呑川緑地、平和の森・平和島・たぬき山・大倉山・本門寺・山王・多摩川台・萩中・洗足池公園等の比較的大きな緑あふれる場所の

ほか、横町の公園・神社でかわるがわる遊ぶ。立入禁止の立て札の無視や、民家のかきをとって怒られることもある。新規開拓の場所は気に入ると翌日に再度行く。雨の日は郷土資料館、図書館、児童館で遊ぶ。夏は平和島公園のプールが格好の遊び場になる。たまには多摩川、野毛山や上野の動物園、秋葉原の交通博物館に弁当持ちで遠征する。交通手段は電車・バス・ワゴン車や徒歩で、ワゴン車のときは定員オーバーの場合もある。

表1の様に、雨天以外は必ず街の探検に出かける。一般の幼稚園や保育園の場合、園外活動は極めて少なく、園庭での活動も少ない園も多いと聞く⁴⁵⁾。一方、公立の保育園の場合でも園外でかなり遊んでいる所もあるが、表2の例のように、園の近くの公園などに限られることが多い。

4. 卒園生を中心にした「あそび塾」の活動

探検隊活動をさらに発展させる目的で、毎土曜日並びに夏休みには毎火・木・土の週3回、卒園生の小・中学生を中心に様々な活動・「あそび塾」がおこなわれている。これは職員有志と参加児童の親が交代で世話役を請負い、子供たちの創意・工夫を発展させる活動であり、一種の子供会活動、学童保育のようなものである。

メンバーは10~15名、小学1年から中学1~2年生で構成されるが、中学生になると、クラブ活動に時間を割かれるため、やめる例が多く、最近や人数が少なくなった。入会金や月会費は保育所の運営資金の一部に当て、「あそび塾のお知らせ」を1~2か月毎に発行している。塾の日の1~2日前に各人が馬込に電話して、集合場所・持ち物・遊びの内容などを確かめることになっている。在園生と合流して活動する場合も多い。なお、あそび塾に入会すると親は自動的に、馬込共同保育所を作る会の会員になる。

5. 他の市民的活動とのネットワーク

大森地区では有機野菜・無添加食品を求めるグループ、環境保護・反公害の団体、生協など様々な市民レベルの活動が行われているが、これらの活動に積極的に参加している園児及び卒園生の親

表1 くりぐみの一ヶ月の活動例

1 (水)雨	入新井図書館
2 (木)	運動会のダンス練習 大倉山
3 (金)	山王方面へ木の実拾い 普景寺
5 (日)	運動会
6 (月)	大倉山
7 (火)雨	変身遊び
8 (水)雨	クッキー作り
9 (木)	代々木公園
14(火)	平和の森公園、ジャブジャブ池
15(水)	山王3丁目公園 (前の公園)
16(木)	本門寺の崖冒険
21(火)	怪獣公園、鹿島神社
27(月)	内川めぐり
28(火)	本門寺探検
29(水)	大倉山
30(木)	洗足池
31(金)	中央、5丁目神社

注1: 1987年10月の場合 (ある5歳児の連絡帳から)。

注2: 表中に記載のない日は当該園児が登園しなかった日である。

表2 一般の保育園での園外活動日数

年齢	登園日数	園外へ出た日数
学齡前	3年	208
	2	190
	1	222
		21(10%)
		33(17%)
		51(23%)

注1: 大森東地区のある公立保育園の場合 (元園児の連絡帳から)。

注2: 園外のほとんどは隣接する公園で、遠いところでも園から100m以内。

が多いため、半ば無意識的・自然発生的に馬込とこれらの組織との間に有機的なネットワークが、人的・物質的に組まれている。また、都内及び近隣の共同保育所との交流も年、数回行われている。

6. 卒園後の問題

以上のような自由な、ある意味では勝手な活動を経てきた子供たちが、どの様な人生を歩むのかが、著者の最も関心のある点である。このような疑問については「40才のクラス会にその回答を求める」⁸³⁾ くらいの気長な態度が必要であろう。

卒園生は開園当初0才保育の子供で、現在高校2年生であるが、どの子も皆、それなりに健やかに成長し、勉強に、スポーツに、音楽に、それぞれの場で活躍しているようである。

しかし、一部の子が小学校1～2年にかけて学校生活に若干の不応を起している。先生の質問に対して、回答がわかかっていても、他の子どもたちのように「ハイ、ハイ、ハイ」と手を挙げない⁸⁴⁾。忘れ物が多かったり、一転して異常なほど忘れ物をしないように気を付け出す。授業中にやたらに腹いたをおこし、保健室の常連になる。鉄棒に片足をかけて数十回も回り続ける。その他担任の先生とトラブルを起した例などを聞いたり、親として実際に経験した。

幸いなことに、これらの不応は3年、4年生となるにしたがって、解消され、その後はむしろ、学習、クラブ活動など広範囲に活躍している例が多い。不応の大半は、自由な保育と厳格な学校生活とのギャップに起因し、その解消は馬込の教育の真価の発揮であるとともに、担当教師の巧みな「継ぎの教育」の成果であると思われる。今度設置される「生活科」の適切な運用により、これらの不応が大幅に軽減され、ますます活躍する子供たちが増えることを期待している。

7. 考察

野外活動中心の保育については、前述の山形・いずみ保育園⁸⁵⁾のほか、様々な形の実践報告がある。「待ち」の子育て・自然流保育の静岡・島田市のたけのこ保育園⁸⁶⁾、そのモデルの埼玉・深谷市のさくら・さくらんぼ保育園⁸⁷⁾、農作業を通じて子供たちを育てる埼玉・騎西町の泥んこ保育園⁸⁸⁾など貴重な保育実践である。しかし、これらはいずれも豊かな自然に恵まれた場所での実践例であり、馬込の様に大都市の、しかも街の中で、積極的に野外活動を行っている例はほとんどない。

もっとも、当初の馬込がそうであった様に、広さが未認可保育室の助成基準一人当たり1.6㎡程度でかつ庭もないため、「路地や近くの公園、小学校の校庭、デパート、街の通りが保育室」を消極的に行っている共同保育所は都会地では比較的多い⁸⁹⁾

馬込は児童福祉法上の施設基準を満たす認可された保育所ではなく、いわゆる無認可保育所である。従って、児童福祉法にもとずいた運営費に対する公的負担がない。しかし、一定の要件にかなうため、区内の他の10数ヶ所の無認可施設と共に「未認可保育室への助成金」を区及び都から受けている。そもそも、認可保育所の数と定員が少なく、0才児保育を行わなかったり、その枠が狭いことなど、保育内容の貧困さが無認可保育所登場の主な原因である。親と子供にとって、認可、無認可の違いはない。施設・設備、職員構成が貧弱⁹⁰⁾で、保育料が高いくらいが主な差だ。

馬込はもともと、産休明け・0才児保育から始まった。発足から10年間位は、保育料がはるかに安い公立に空きができると、こぞって移ったが、今ではそれが少なくなり、逆に公立から戻ったり、移ってくる子供も出てきた。労働者の賃金が高めとなり、親の年齢も比較的高くなったことで、生活が豊になった結果と思われるが、やはり馬込の保育が質も高く、魅力的であることが最大の原因であろう。

馬込の子供たちは街を探検する。佐野氏は以下のように語っている。「子供たちと一緒に街へ出ることで、都会の姿が、都会での生活のあり方が見えてくる。路地を歩くことで、角に駄菓子屋があり、おばあさんがニコニコと店番をしていたり、いつも同じ場所で老人たちが立ち話や日向ぼっこをしているのに気がつく。路地の奥に児童公園があり寒くなるにしたがって赤や黄色の落葉が増える。たまに、おばあさんがそれを燃やしている。そのうち、どこの家の庭にビワの木があり、いつも同じ季節に実をつけること、どこにどんな色の犬がいることなども自然にわかってくる。現実の街の姿がみえてくる。」

都会で注意深く生活してみると、街も息をして

いることに気づく。草々の気、木々の気、そこで暮らしている人々の気を感じる。アスファルト、板塀、屋根瓦なども季節や天候によっては生きているような気がする。佐野氏はまた「ある区がやっている、“子供のハラッパ”の様な子供たちを特定な場所に集めて、そこだけで遊ばせるような試みはどこか間違っている」と述べている。家族と共に生活する、その街の中で遊ぶことは、子供たちの健全な成長に必要なことと思われる。馬込は庭がほとんどないので仕方なく、屋外で遊ぶはめになったのだが、これが不幸中の幸いとなった。

最近、地域の教育力がなくなってきたと言われる。これは主に、そこに生活する大人たちの教育力を示していると思われるが、馬込の活動を通してみると、地域の人々・遊び場・文化施設・文化財、家庭の教育力並びに保育所・幼稚園・学校の教育力など全てを合わせた総合的なものとしてとらえるべきと考える。またこの場合の教育力とは単に教え育む力ということだけでなく、子供が本来持っているものを引出し、子供が自らそれを育むことを援助する活動力と解すべきである。押し付け教育から education の教育への転換を提唱したい。

木村氏によると、education は教育と完全に同義ではない。単語の発生の仕方、語源の観点から分析すると、e-duc-ation というふうに分かれる。「e」はラテン語の“ex-”で「外へ」の意味、「duc-」はラテン語の“ducere”で「引っ張る」あるいは「導く」の意味、英語で言うと“pull”ないし“lead”に当たり、“-ation”は単なる接尾語。すなわち education とはいろいろな可能性を持つ子供たちから、人間的な能力を引き出してやることである。一方、日本語の教育とは子供に、一方的に教えこむ意味が強い。馬込の保育はこの education に通じるところが多い。危険な遊びでもどんどんやらせる「見て見ぬ振り教育（保育）」¹³⁾、子供・親・保育者が相互に愛称で呼び合い、子供の自主性を最大限尊重し、大人の価値観の押し付けを最小限にし、共に遊び、共に生長する「教育せざる教育（保育）」¹⁴⁾と言えよう。

今次の教育課程の改訂により、小学校の1、2年に生活科が設置された。学習指導要領によると、その目標は次のようである。「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」¹⁵⁾ また、1988年4月に文部省から出された「生活科の活動参考例」¹⁶⁾によると、2年の場合として、1)わたしの町を調べよう、2)生き物を育てよう、3)雨の日を楽しくすごそう、4)植物を育てよう、5)お祭りをしよう、6)おもちゃ大会をしよう、7)子ども郵便局をひらこう、8)冬のくらしをしらべよう、9)わたしのきろくを作ろうが挙げられている。これらにもとずいて、各地の小学校で研究が行われると共に、文部省の講習会が各地方ごとに行われている。そして、多くの学校で生活科の授業の試行が始まっている。

各地の研究成果として、例えば2)に対応して、「ザリガニと遊ぶ」、4)では「イネを育てる」、6)では「船を作り、プールで遊ぼう」などの内容が取り上げられている。しかし、ザリガニを飼う池をわざわざ作ったり、ザリガニを大量に買い求めたり、周囲にザリガニのいる水路や水田があっても、事故を恐れるあまりなかなか校外に出ないなど、問題が多い様である¹⁷⁾。著者は上記の活動参考例の多くに、馬込の活動が対応し、学ぶべき点が多い様に思われる。

佐野氏は大田教育新聞への寄稿の中で大森ジャングル探検隊の活動を紹介した後で教師に対し次のような提言をしている。「どうか、お天気もったいない日はたまに、理科でも社会でも体育でも図工でもうまくカコつけて、教室の外へ子供たちと子供たちが住み育つ街へ探検に出てみませんか。大人も子供も気づかず通過してしまう“地元”だけど、見知らぬ見慣れぬ世界として探検をはじめると、いくらでもドラマがとびだしてきます。学校一家族へと閉塞していく私たちの子供たちに、不可思議で夢中な子供の時間をドラマさせていきませんか。生まれてきてよかったと」¹⁸⁾

先にも述べたが、学齢前1～2年から小学校低

学年ごろの様々な直接体験が感性を深め、その後の生活に生きてくる。自然に対する畏敬の念、生命を育てる喜び、死の悲しさなどを実感し、ともだちと共同する習慣を身につけることや、鉛筆を削ったり、雑巾をしぼったり、水鉄砲、竹とんぼや紙飛行機を作ったりすることが大切である。前者は喜怒哀楽に関係し人間の基本を作り、後者は手の働きを発達させるだけでなく、脳の発達にも好影響を与え、知能を向上させると言われている⁹⁾。なお、直接体験は見る、聴く、触れる、嗅ぐ及び味わうの五感(官)の全てを用いた場合、効果が高いとの指摘⁽¹⁰⁾があるが、馬込の活動はほぼこの要件を満たしている。最近、農村部の中・高校生が身近の自然の価値に気付かないことが問題となっており、その原因の一つとして、小学校低学年までに多様で豊富な自然の中で泥まみれになって遊ぶなど、豊富な原体験を経していないことが挙げられている⁹⁾。著者は馬込出身の子供の方が、これらの中・高校生よりも豊富な原体験を持ち、豊かな感性を身につけているのではないかと推察している。また、馬込の子供たちは、路地を探検するなかで遊び場を発見し、そこで創意工夫しながら自由に遊ぶ。そこには自由な「遊び場、遊び時間、遊び仲間」という三位一体の本来の子供社会⁽¹¹⁾に近い姿が認められるようだ。

注

- 注1) 野外教育シンポジウム実行委員会主催・第4回野外教育シンポジウム(長野県山の内町志賀高原)での講演、アメリカの大学における野外教育(川村協平,1989)から。
 注2) 同上、新しい保育を求めて(草刈広一,1989)から。
 注3) 同上、自然保護教育における原体験の位置(湊秋作,1989)における著者の質問に答えて。
 注4) 現在は、「大森の街全部が僕たちの庭、僕たちは大森ジャングル探検隊です」と書かれている。
 注5) 例えば以下のように呼ばれる。園長の松井妙子;たえこさん、渡辺勝美;からあげ、佐

野良一;さのし、菊池正子;まさこさん、佐々木美保;みほねーちゃん等。卒園生が小学校の先生に保育園時代の先生の名前を聞かれて、「からあげ」と答えて、「それは友達のことでしょう」と叱られたとの話がある。

- 注6) 馬込共同保育所・大森ジャングル探検隊記,1988・初夏号:1-2,「大森の街は僕たちの庭」の記述を若干修正。
 注7) 大田区・区民便利帳(1986)より。
 注8) 兵庫県のある私立保育園の保父さんの話より。
 注9) 前出・⁽¹¹⁾のシンポジウムにおける総合討論での白梅短大・近藤正樹氏の発言より。
 注10) 馬込の生活では一人一人の子どもが職員や大人たちに、主観的にも客観的にも十分に認められていたことから、大人に対して強く自己主張をする必要がなかったことによるものと思われる。
 注11) テレビ朝日・ニュースステーション(1988.12.15)より。
 注12) 馬込の職員構成は例外的に充実している。
 注13) 野外教育シンポジウム実行委員会主催・第3回野外教育シンポジウム(愛知教育大学)での講演、見てみぬふりの自然学習のすすめ(山田卓三,1988)より。
 注14) NHK第1テレビ・おはようジャーナル(1989.6.27)より。
 注15) 大田教育文化センター発行・大田教育新聞より。

文献

- (1) 石 弘之 1989. 地球化する環境破壊. 世界 1:41-51. 岩波書店, 東京.
 (2) 石毛鋭子 1987. 育ち合いの保育. 現代書館, 東京.
 (3) 木村哲也 1989. 英単語の散歩道. ASA BOOKS, 東京.
 (4) 近藤正樹 1989. 観察には感覚器官のすべてを活用しよう. 月刊「芽」9(4):51. 誠文堂新光社, 東京.
 (5) 河野重男 1989. 新しい幼稚園教育要領と

その展開。チャイルド本社，東京。

- (6) 久保田 競 1989. 手を使う子は頭も使う.
自然と人間を結ぶ. 5:52-57. 農山漁村文化協
会, 東京.
- (7) 文部省 1989. 小学校学習指導要領. 大蔵
省印刷局.
- (8) 向山 浩・山田卓三 1991. 感性を通して
郷土の自然を理解させる学習. 日本環境教育学
会研究発表要旨集. pp.63.
- (9) 村井 実 1977. 教育. 細谷俊夫他編 教
育学大事典 第2巻. 7版, pp.58. 第一法規,
東京.
- (10) レスター・ブラウン編著, 松下和夫監訳.
1990. 地球白書'90-'91. ダイヤモンド社, 東
京.
- (11) 高浦勝義 1989. 生活科の考え方進め方.
れい明書房, 名古屋.
- (12) 寺本 潔 1990. 子どもの遊ぶ世界はい
ま. 自然と人間を結ぶ. 8:3-13. 農山漁村文化
協会, 東京.
- (13) 山田桂子 1986. 「待ち」の子育て. 農山漁
村文化協会, 東京.